

2007年 第1回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2007年5~7月)

2007年4月27日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2007年5~7月の見通し

- 今期のスルメイカの来遊量は、日本海全体では昨年をやや下回り、近年平均並みと予想されます。漁獲は、山陰では昨年を上回りますが、北陸では豊漁であった昨年を下回る見込みです。
- 日本海対馬暖流域の水温はやや高めで推移するため、魚群の北上は昨年より早いと予想されます。これにともない、北陸では漁期が短くなると考えられます。
- 北陸以北の海域では、昨年よりも小型の個体が多いと予想されます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づいて、石川県水産総合センターが県内に情報提供するものです。全国向けの情報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/index.html>)をご覧ください。

1. 資源の状況

幼生の分布量 日本海では、昨年の秋に生まれたスルメイカが今年の春以降に漁獲されます。昨年10~11月に行われたスルメイカ幼生の分布量調査では、1調査点当たりの平均採集個体数は1.35個体であり、2005年(1.72個体)の79%、近年平均(2.31個体)の58%でした(図1)。

従って、昨年秋に発生した幼生の量は、1990年代以降の高水準を維持しているものの、一昨年および近年平均よりは少なかったと判断されます。

加入前の分布量 漁獲対象になる直前のスルメイカ(外套長2~10cmの個体)の資源量調査が4月に行われました。それによると、1調査点当たりの平均採集個体数は54.5個体で、昨年(17.4個体)の313%、近年平均(33.7個体)の162%でした(図2)。しかし、5~7月に漁獲対象に成長する5cm以上の個体の分布量は近年平均並みで、昨年よりも小型となっています。

これらのスルメイカは、今後、北陸以北の海域に来遊することから、北陸以北の海域では、昨年よりも小型の個体が多くなると考えられます。

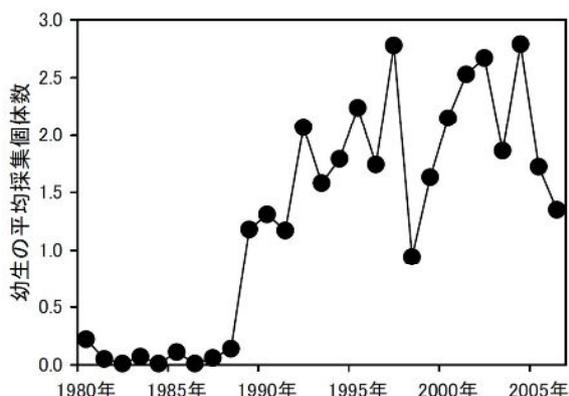


図1 幼生の平均採集個体数の年推移

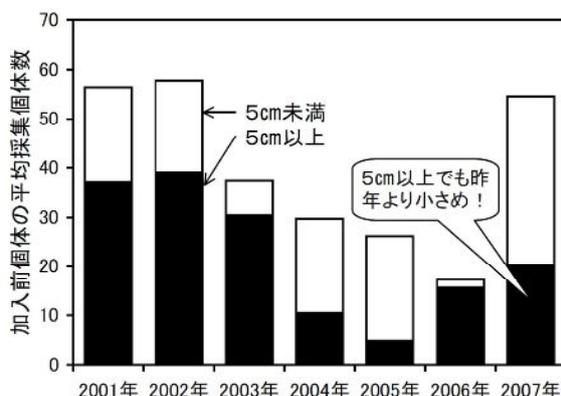


図2 加入前個体の平均採集個体数の年推移

2. 日本海対馬暖流域の水温と北陸の漁況

今年4月の海洋観測結果では、日本海対馬暖流域の水温は「やや高め」～「はなはだ高め」となっており(図3)、4～6月も「やや高め」で経過すると予想されています。また、佐渡沖冷水の張り出しも弱いため(図4)、魚群の北上が早く、北陸では漁期が短くなると考えられます。このため、石川県の漁獲量は豊漁であった昨年を下回ると考えられます。

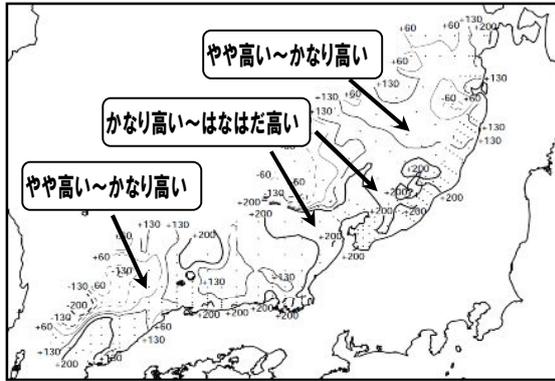


図3 今年4月の水深50m水温の年平均偏差(%)

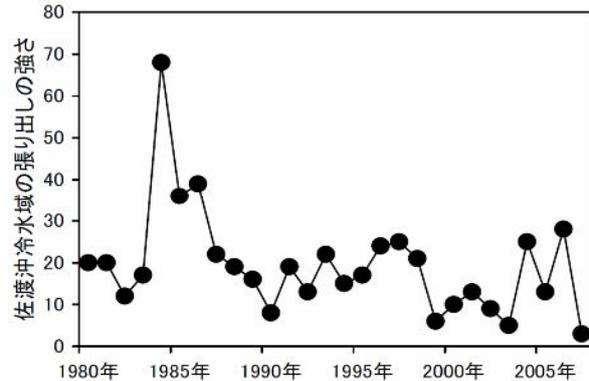


図4 佐渡沖冷水域の張り出しの強さの年推移

3. 山陰沖の漁況

境港の今年3月上旬～4月中旬までの漁獲量は、不漁であった昨年を上回り、2000～2005年の平均よりもやや多くなっています(図5)。また、山口県～兵庫県の今年1月から3月までの漁獲量も昨年および近年平均を上回る水準となっています。

山陰沖では、予報期間の前半は昨年を上回る漁獲量が期待されますが、魚群の北上が早いと考えられるため、予報期間全体では、近年平均並みの漁獲量になると考えられます。

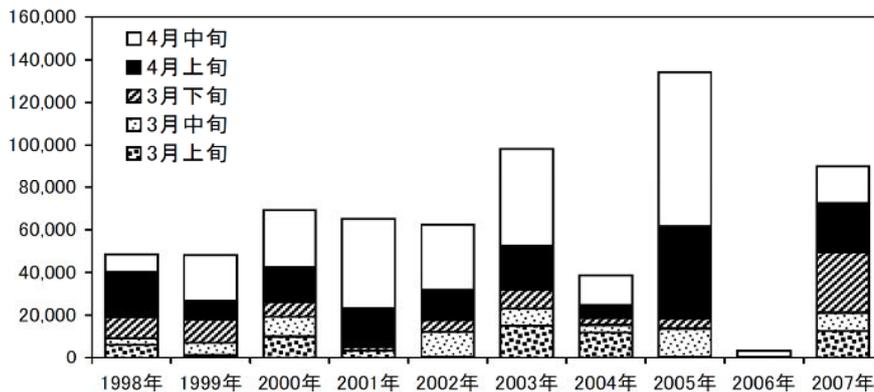


図5 境港(鳥取県)におけるスルメイカの水揚げ箱数の年推移

2007年 スルメイカ情報 第1号

石川県水産総合センター

TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324

http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm

■ 調査船白山丸のいか釣り試験操業結果 ■

調査船白山丸は5月22日から5月29日に、佐渡島沖合～日本海西部海域の海洋前線(暖水域と冷水域の境界)付近を中心にいか釣り試験操業を行いました(表1・図1)。

佐渡島から能登半島の沖合では、分布密度の指標であるCPUE(釣機1台1時間あたりの漁獲尾数)が23.8～71.9と高く、スルメイカが高密度に分布していました。この海域で漁獲した個体の外套長は概ね17～22cm程度で、漁獲物としては、冷凍ブロック銘柄の51～60尾入を中心に、41～45尾入、46～50尾入、61～70尾入が主体でした(図1)。

東経135度以西・北緯38度付近の海域では、CPUEは0.3～1.8と低く、外套長16cm未満の小型個体の割合が高く、好漁場は発見できませんでした。5月28日には、海洋前線のやや南側で試験操業を行いました。この操業では、漁獲はさほど良好ではありませんでしたが、レーダーおよび目視により調査船周囲で約13隻のいか釣り漁船が操業していることを確認しました。なお、本調査では時化のため、大和堆南側から隠岐堆付近の漁場探索が十分できませんでした。

表1 調査船白山丸第1次いか釣り調査結果

調査日	操業位置	操業時間 釣機台数	釣獲尾数 (ケース数)	CPUE	主な漁獲物のサイズ		水温(°C)	
					外套長	主な銘柄	0 m	50 m
5月22日	38_39.0 N 137_04.2 E	9.0時間 14台	7,208尾 (122C/S)	57.2尾	17~21 cm	46~50尾入 51~60尾入	15.3	12.37
5月23日	38_44.7 N 137_31.0 E	9.0時間 14台	9,065尾 (150C/S)	71.9尾	17~21 cm	51~60尾入 61~70尾入	14.8	12.33
5月24日	38_06.8 N 136_12.5 E	9.0時間 14台	2,996尾 (66C/S)	23.8尾	19~23 cm	41~45尾入 46~50尾入	16.5	11.97
5月25日	38_02.5 N 134_55.7 E	9.0時間 14台	224尾 (4C/S)	1.8尾	14~19 cm		14.2	6.66
5月26日	38_05.6 N 133_53.0 E	9.0時間 14台	62尾 (0C/S)	0.5尾	13~17 cm		15.4	11.10
5月27日	38_01.4 N 134_49.8 E	9.0時間 14台	37尾 (0C/S)	0.3尾	13~20 cm		14.1	7.20
5月28日	37_49.3 N 134_46.7 E	9.0時間 14台	2,141尾 (39C/S)	18.0尾	17~20 cm	51~60尾入 61~70尾入	16.4	14.65

白山丸のいか釣り装備: 自動いか釣り機14台、メタルハライドランプ234キロワット

CPUE: 自動いか釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数(資源量の指標)

主な銘柄: ブロック凍結(8.3キログラム)あたりの尾数に基づく銘柄

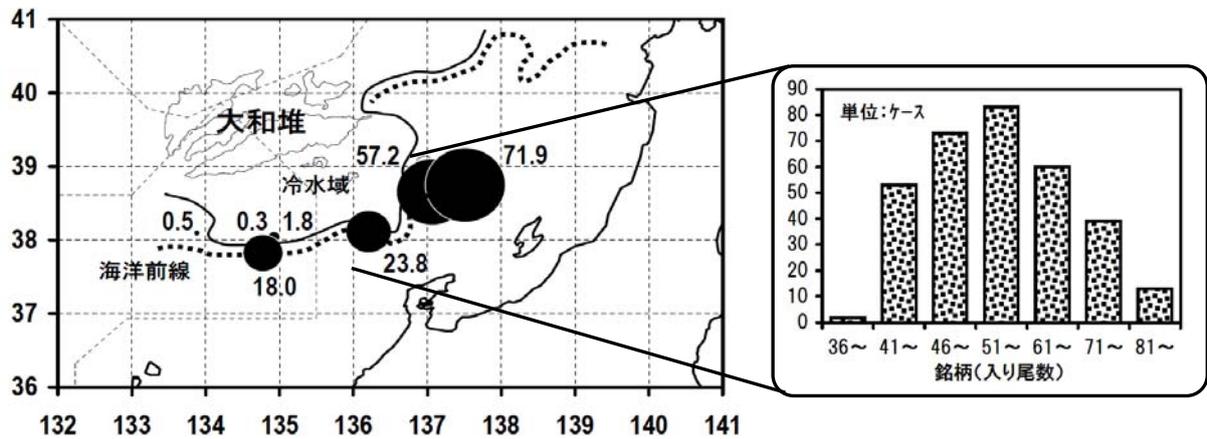


図1 調査船白山丸第1次いか釣り調査CPUE分布と東経136以東の漁獲物組成

■ いか釣り漁場と生いかの水揚量 ■

人工衛星画像から、本年5月23日現在、沿岸のスルメイカ漁場の中心は既に佐渡島から男鹿半島の沿岸に移動しています(図2)。昨年同時期には、本県沿岸で多数の漁船が操業していましたが、今年は沿岸水温が平年に比べて高めに推移しているため、漁場の北上も早くなっています。

本県の本年5月1日から20日までの生いか水揚量は、昨年・一昨年に比べて少なく、特に30尾入~40尾入以上の小型サイズの水揚量が大幅に減少しています(図2)。小型で未熟な個体は、春から夏にかけて海洋前線沿いに沖合から沿岸に来遊し、漁場を形成します。今年は水温が高いため、本県沿岸に来遊せずに、多くは佐渡島以北の沿岸へと回遊していると考えられます。このため本県沿岸で操業する漁船が減少し、漁獲量も減少したと考えられます。

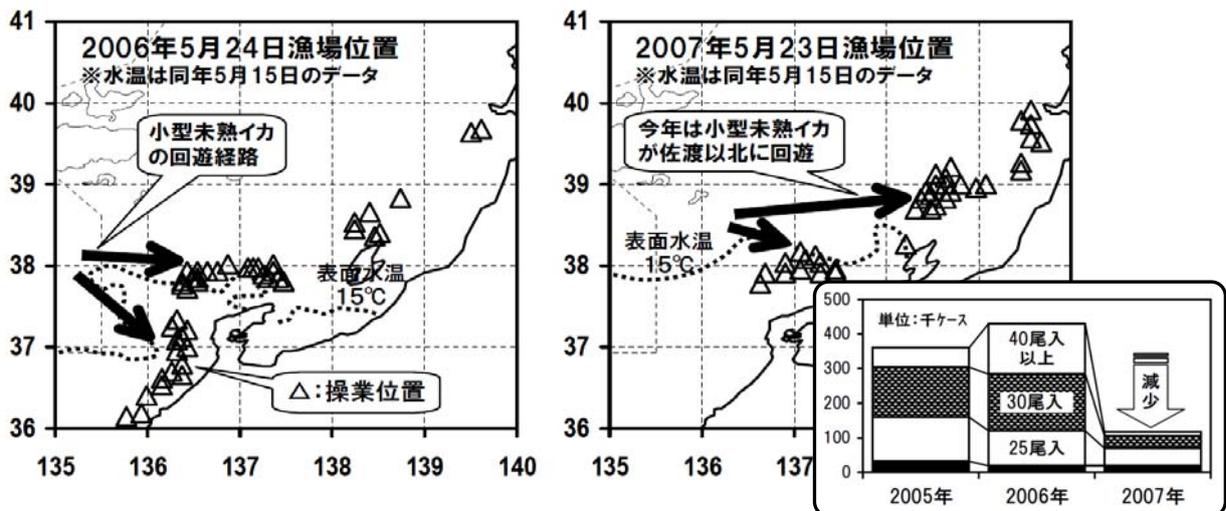


図2 人工衛星画像からみたいか釣り漁場の位置と本県の生いか水揚量

2007年 第2回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2007年8～12月)

2007年7月20日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2007年8～12月の見通し

今期のスルメイカの来遊量は、日本海全体では昨年および近年平均を下回ります。

海域別の来遊量は、津軽海峡から北海道の沿岸では昨年および近年平均並みですが、秋田県から山陰の沿岸、並びに沖合域では昨年および近年平均より少ないと予想されます。

沖合域では、9月まで漁獲は振るいませんが、10月以降は太平洋側から来遊する群が加わることで、漁獲の回復が期待されます。

魚体サイズは近年平均よりも小さく、特に沖合で小型と予想されます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づいて、石川県水産総合センターが県内に情報提供するものです。全国向けの情報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/index.html>)をご覧ください。

1. 日本海漁場一斉調査の結果

資源量 スルメイカの資源量は毎年6月下旬から7月上旬に調査船が実施する漁場一斉調査によって評価されます。この調査では、漁獲尾数、釣り機台数および操業時間から、釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(以下「CPUE」という)が求められ、全調査点の平均CPUEが資源量の指標となります。

今年の平均CPUEは11.18尾であり、昨年(15.80尾)の71%、近年(2002年～2006年)平均(17.21尾)の65%でした(図1)。この結果から、今年の日本海におけるスルメイカの資源量は昨年および近年平均を下回ると判断されました。

魚体の大きさ 漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套長別の資源量を調べてみました。その結果、今年は外套長20cm未満の資源量は昨年および近年平均並みでしたが、外套長20cm以上の資源量は昨年および近年平均を大きく下回ったことが明らかになりました(図2)。大型個体の少なかったことが今年の特徴となっています。

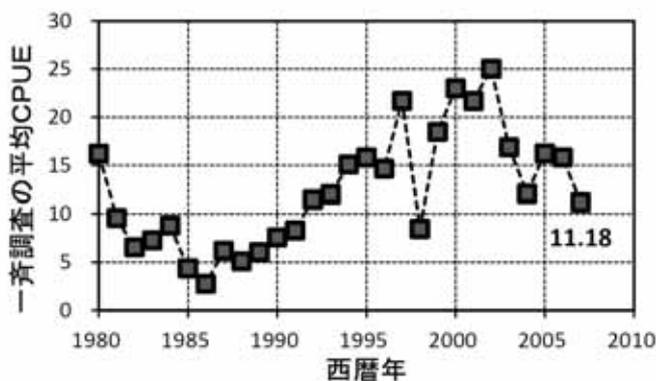


図1 一斉調査の平均CPUEの経年変化

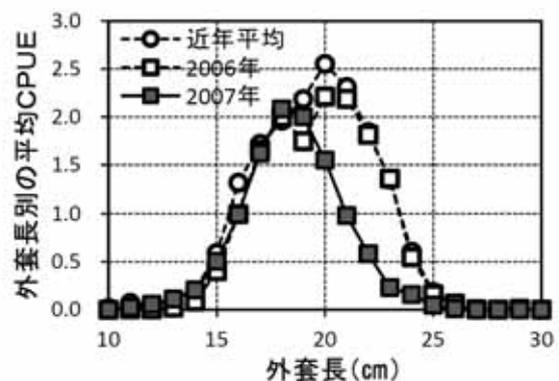


図2 外套長階級別の平均CPUEの比較

分布状況 漁場一斉調査時におけるスルメイカの分布状況は図3のとおりでした。

石川県から秋田県の沿岸では、CPUEの低い調査点が多く、津軽海峡から北海道の沿岸では、CPUEが20～30尾と分布密度の比較的高い調査点が多くみられました。今年の春期は石川県沿岸で漁期が短く、スルメイカの北上は早いと推定していましたが、このことを裏付ける結果となりました。

沖合域では、CPUEが20尾前後と分布密度の比較的高い海域もありましたが、大型個体が少ないことが特徴的でした。また、沿海州南部沖(ロシア海域)では、多くの調査点でCPUEが5尾以下であり、分布密度が非常に低いことが明らかとなりました。

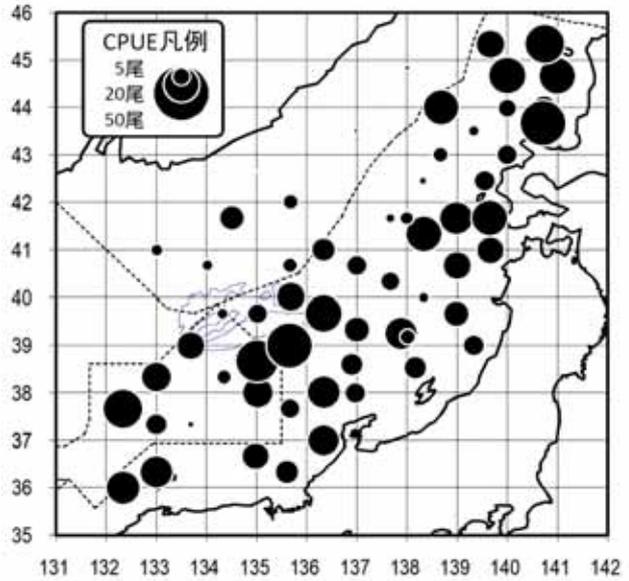


図3 漁場一斉調査時のスルメイカの分布

2. 今年6月までの漁模様

今年は沿岸域の水温が高く、スルメイカの北上が早かったと判断されます。

この影響を受けて、今年4月から6月の水揚量は、石川県から秋田県では、昨年および近年平均を大きく下回りました。その一方で、津軽海峡から北海道の沿岸では、漁期が早く始まり、水揚量は昨年および近年平均を上回りました(図4)。

なお、今年4月から6月の日本海側沿岸各地の総水揚量は、昨年の69%、近年平均の82%と少なめに推移していました。

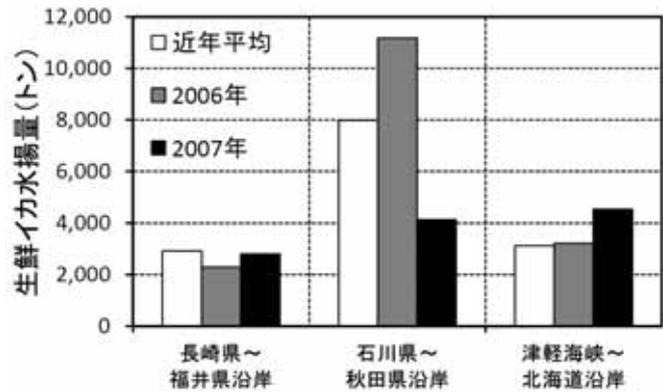


図4 4月～6月の生鮮スルメイカの水揚量の比較

3. 太平洋側のスルメイカ漁況予報

太平洋側の漁況予報が今年7月13日付けで公表されました。この予報によると、7月から9月までの予報期間中、常磐～北海道の沿岸では、スルメイカの来遊量は、昨年を上回り、2004年並みになると予想されています(図5)。

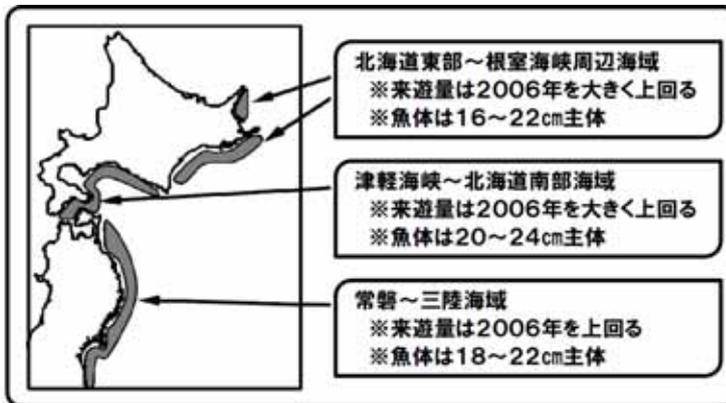


図5 太平洋側の7月～9月のスルメイカ漁況予報

太平洋側のスルメイカの一部は、10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を経由して日本海に来遊します。日本海では、太平洋側からの来遊群が加わるにより、10月以降、沖合域を中心に漁獲の回復が期待されます。

2007年 スルメイカ情報 第2号

石川県水産総合センター

TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324

http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm

■ 調査船白山丸のいか釣り試験操業結果 ■

調査船白山丸は8月20日から8月29日に、日本海沖合の大和堆付近の海域を中心にいか釣り試験操業を行いました(表1・図1)。

分布密度の指標であるCPUE(釣機1台1時間当たりの漁獲尾数)は8.1~46.7尾であり、操業点によって漁獲成績にバラツキがみられました。このことから、この海域では、好漁する場合もあるものの、全体的に漁場は安定していないと考えられました。漁獲物のサイズは、冷凍いか銘柄の31~35尾入り、36~40尾入り、41~45尾入りが主体であり、昨年同期よりもやや小型でした。

調査中に魚群探知機を用いて漁場探索したところ、東経135~136度の日ロ中間ライン沿いにイカの反応が多くみられました。また、人工衛星による夜間可視光画像を調べたところ、白山丸の調査期間中、北緯40~41度・東経134~135度の海域にいか釣り漁船が多くみられました。日本海沖合では、漁期始めより漁獲不振が続いていましたが、今後、漁獲は回復してくるものと予想されます。

表1 調査船白山丸第3次いか釣り調査結果

調査日	操業位置	操業時間 釣機台数	釣獲尾数 (ケース数)	CPUE	主な漁獲物のサイズ		水温(°C)	
					外套長	主な銘柄	0 m	50 m
8月21日	39_59.2 N 135_20.0 E	10.0時間 14台	5,395尾 (137C/S)	38.5尾	19~22 cm	36~40尾入 41~45尾入	25.1	4.44
8月22日	39_59.3 N 135_20.0 E	10.0時間 14台	2,083尾 (49C/S)	14.9尾	20~22 cm	31~35尾入 41~45尾入	24.0	4.47
8月23日	40_27.3 N 136_00.4 E	10.0時間 14台	6,539尾 (179C/S)	46.7尾	20~22 cm	31~35尾入 36~40尾入	24.6	6.20
8月24日	40_27.5 N 136_01.1 E	10.0時間 14台	1,133尾 (34C/S)	8.1尾	21~22 cm	31~35尾入	25.0	6.11
8月25日	40_01.7 N 135_09.0 E	10.0時間 14台	5,413尾 (135C/S)	38.7尾	20~22 cm	31~35尾入 36~40尾入	24.1	4.54
8月26日	40_01.8 N 135_11.8 E	5.0時間 14台	1,096尾 (27C/S)	15.7尾	20~22 cm	31~35尾入	24.0	4.60
8月27日	40_01.6 N 134_53.1 E	9.3時間 14台	1,423尾 (45C/S)	11.0尾	21~23 cm	26~30尾入 31~35尾入	24.3	5.01

白山丸のいか釣り装備: 自動いか釣り機14台、メタルハライドランプ234キロワット、LED集魚灯15キロワット

CPUE: 自動いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(資源量の指標)

主な銘柄: ブロック凍結(8.3キログラム)当たりの尾数に基づく銘柄

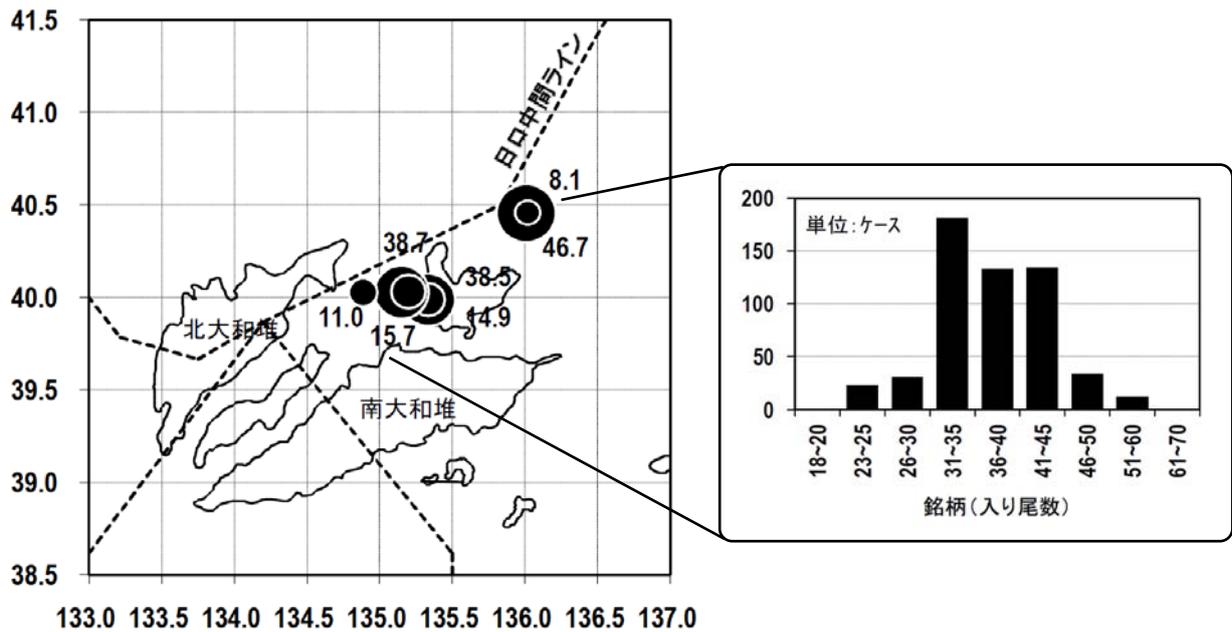


図1 調査船白山丸第3次いか釣り調査のCPUE分布と漁獲物組成

■ 現在のいか釣り漁場と今後の予想 ■

人工衛星の夜間可視光画像から判断した9月8日現在の日本海におけるいか釣り漁場は図2のとおりです。8月中旬以降、日本海沖合ではロシア海域での操業が主体となっていますが、夜間画像を比較した結果、長期に渡って漁場となった海域はほとんどなく、数日単位で漁場は移動している模様です。このことから、安定した漁場はまだ形成されていないと考えられます。

本年8月は、北海道東部沿岸で、スルメイカが好漁されました。これらのスルメイカの一部は、10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊することから、日本海では、10月以降、沖合漁場を中心に漁獲の回復が期待されます(平成19年7月20日公表:日本海スルメイカ漁況予報より)。

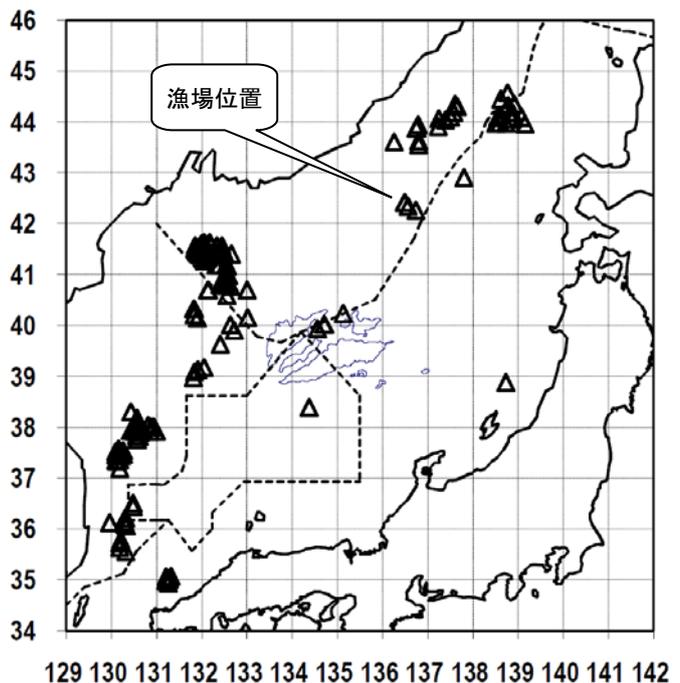


図2 夜間可視光画像から判断したいか釣り漁場

2007年 スルメイカ情報 第3号

石川県水産総合センター

TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324

http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm

調査船白山丸のいか釣り試験操業結果

調査船白山丸は9月19日から9月26日に、能登半島北西沖および大和堆付近の海域でいか釣り試験操業を行いました(表1・図1)。

能登半島沖では、分布密度の指標であるCPUE(釣機1台1時間当たりの漁獲尾数)は1.2尾と低く、スルメイカはこの海域まで南下していないと考えられました。一方、大和堆海域では、月の満ちにともなって漁獲成績は低下する傾向にありましたが、CPUEが90尾以上に達する操業点もありました。魚群探知機およびソナーによる漁場探索でも、この海域にはスルメイカの反応が多くみられました。漁獲物のサイズは、冷凍いか銘柄の18~20尾入り、23~25尾入りが主体で、昨年同期に比べて18~20尾入りの比率が高く、魚体は昨年よりもやや大型でした。

今年8月の調査では、大和堆海域における分布密度はさほど高くありませんでした。今回の調査結果から、分布密度は次第に高まってきており、今後、この海域での操業が本格化すると予想されます。

表1 調査船白山丸第4次いか釣り調査結果

調査日	操業位置	操業時間 釣機台数	釣獲尾数 (ケース数)	CPUE	主な漁獲物のサイズ		水温 ()	
					外套長	主な銘柄	0 m	50 m
9月19日	38_18.1 N 136_22.1 E	2.3時間 14台	39尾 (0C/S)	1.2尾	19~22 cm		24.0	14.59
9月19日	39_13.8 N 134_11.7 E	7.1時間 14台	6,897尾 (292C/S)	90.0尾	24~26 cm	18~20尾入 23~25尾入	22.7	6.03
9月20日	39_14.4 N 134_11.3 E	7.8時間 14台	6,410尾 (263C/S)	59.1尾	25~28 cm	18~20尾入 23~25尾入	23.2	5.49
9月21日	39_13.2 N 134_13.2 E	10.0時間 14台	3,421尾 (143C/S)	24.4尾	24~27 cm	18~20尾入 23~25尾入	23.5	5.82
9月22日	39_17.9 N 134_27.8 E	5.8時間 14台	7,473尾 (265C/S)	92.8尾	21~24 cm	18~20尾入 23~25尾入	22.5	5.77
9月23日	39_20.9 N 134_29.8 E	10.5時間 14台	2,278尾 (88C/S)	15.5尾	21~25 cm	18~20尾入 26~30尾入	22.9	4.37
9月24日	39_19.9 N 134_29.8 E	10.0時間 14台	2,485尾 (92C/S)	17.8尾	22~25 cm	23~25尾入 26~30尾入	22.8	4.29
9月25日	39_25.6 N 134_32.0 E	9.5時間 14台	653尾 (27C/S)	4.9尾	23~26 cm	18~20尾入 23~25尾入	22.7	4.13

白山丸のいか釣り装備: 自動いか釣り機14台、メタルハライドランプ234キロワット、LED集魚灯15キロワット

CPUE: 自動いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(資源量の指標)

主な銘柄: ブロック凍結(8.3キログラム)当たりの尾数に基づく銘柄

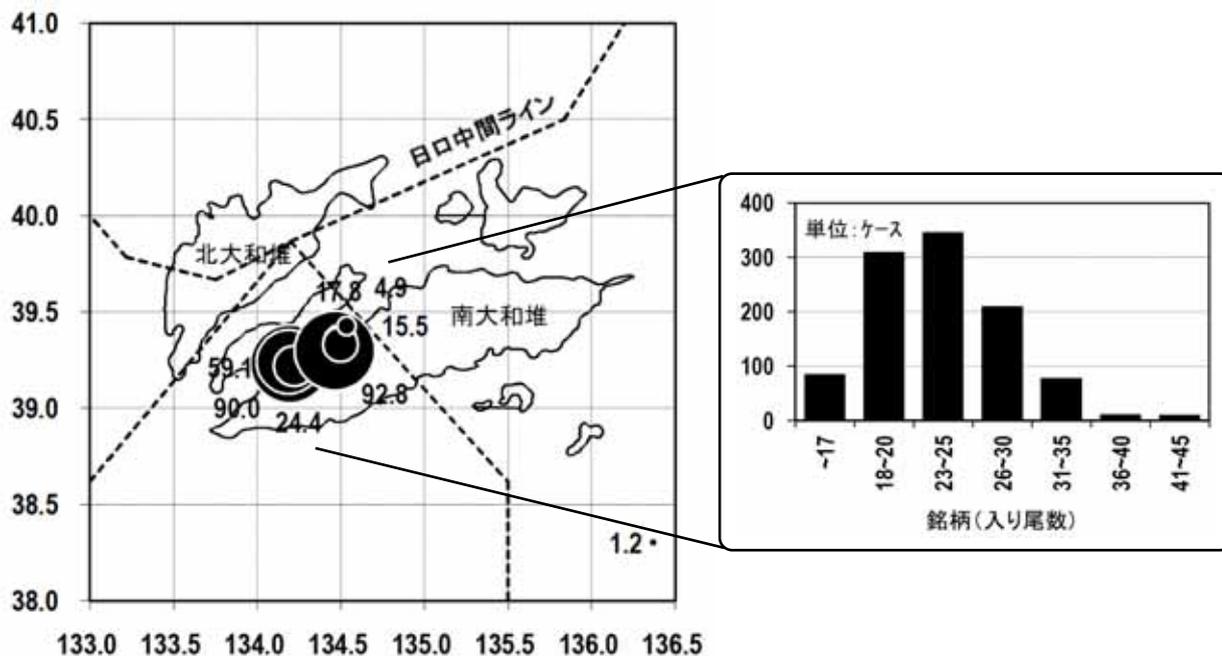


図1 調査船白山丸第4次いか釣り調査のCPUE分布と漁獲物組成

現在のいか釣り漁場と今後の予想

人工衛星の夜間可視光画像から判断した10月2日現在の日本海におけるいか釣り漁場は図2のとおりです。9月下旬以降、北海道西沖での操業が主体となっています。大和堆付近で操業する漁船では、水温の低下とともに漁場は北大和堆から南大和堆へと南下しつつあります。

今年8月は、北海道東部沿岸で、スルメイカが好漁されました。これらの一部は宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に來遊すると考えられます。今後、これらの群は、北海道西沖で好漁場を形成している群と合わせ、水温低下とともに山陰沿岸から東シナ海に向けて南下することから、10月以降、日本海沖合では大和堆海域を中心に漁場が形成されることが考えられます。

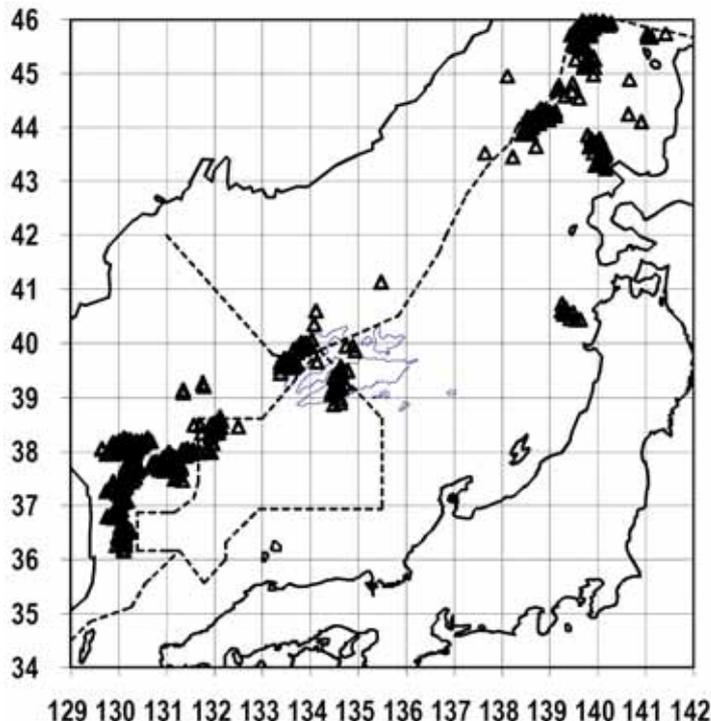


図2 夜間可視光画像から判断したいか釣り漁場

2008年 スルメイカ情報 第1号

石川県水産総合センター
 TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324
<http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm>

■ 冬季の定置網による漁獲量の予想 ■

本県沿岸の定置網では、冬季にスルメイカが漁獲されます。これらのスルメイカは、前年の冬に東シナ海周辺で生まれた群（冬生まれ群）であり、春から夏にかけて成長しながら日本海および太平洋を北上します。太平洋側を北上した群の一部は宗谷海峡や津軽海峡を経て日本海に入り、日本海を北上した群と合流し、秋から冬にかけて日本海を南下します。この南下の途中に本県沿岸に来遊して漁獲されます。

本県沿岸への来遊は、海洋条件に左右されます。特に、佐渡沖冷水域の張り出しが強い場合には、南下経路が沿岸寄りになるため、本県への来遊量が増加します。近年の定置網によるスルメイカの漁獲量と佐渡沖冷水域の面積（冷水の張り出しの強さの指標）の推移をみても（図1）、佐渡沖冷水域の張り出しが強い（弱い）場合には漁獲量が多い（少ない）傾向にあることが分かります。一方、冬生まれ群の資源量は2000年以降、概ね一定で推移しています。

海洋観測により、昨年11月の佐渡沖冷水域の張り出しは弱いことが明らかになっています。そこで、佐渡沖冷水の張り出しと漁獲量の関係から、冬期（昨年12月から本年4月まで）の本県定置網によるスルメイカの漁獲量は278トン程度と推定され、過去5年間の平均漁獲量（673トン）を下回り、昨年並みになると予想されます。

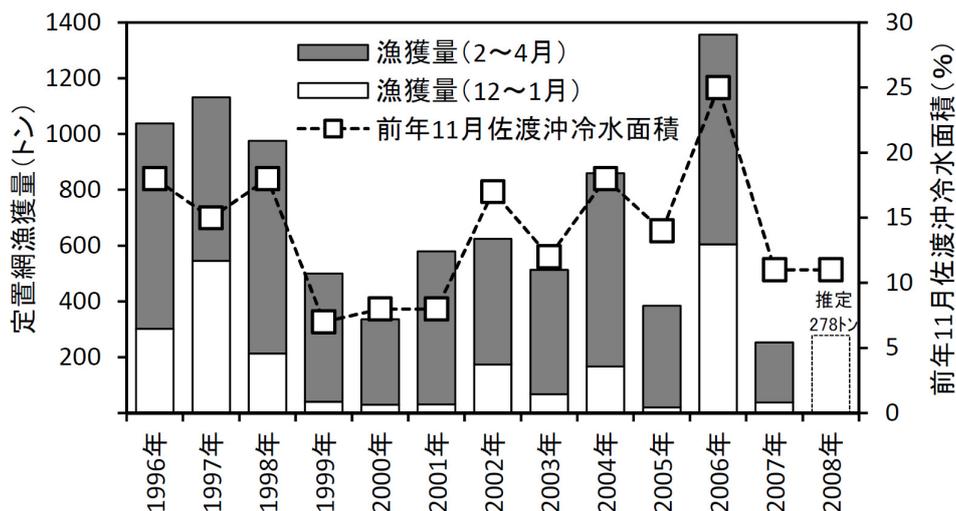


図1 冬季の定置網によるスルメイカの漁獲量と佐渡沖冷水域面積の経年変化

2008年 第1回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2008年5~7月)

2008年4月25日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2008年5~7月の見通し

- 今期のスルメイカの来遊量は、日本海全体では昨年を上回り、過去5ヵ年平均並みと予想されます。
- 日本海対馬暖流域の水温はやや高めで推移すると予想されており、魚群の北上は早く、漁期は短くなると考えられます。このため、石川県周辺海域の漁獲量は、昨年を上回るものの、過去5ヵ年平均には及ばないと予想されます。
- 魚体の大きさについては、山陰沖では大型個体が少ないと予想されます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づいて、石川県水産総合センターが県内に情報提供するものです。全国向けの情報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnri.fra.affrc.go.jp/index.html>)をご覧ください。

1. 資源の状況

幼生の分布量 日本海では、昨年の秋に生まれたスルメイカが今年の春以降に漁獲されます。昨年10~11月に行われた幼生の分布量調査の結果では、1調査点当たりの平均採集個体数は1.56個体であり、2006年(1.35個体)の116%、過去5ヵ年平均(2.08個体)の75%でした(図1)。

従って、昨年秋に発生した幼生の量は、1990年代以降の高水準を維持しているものの、過去5ヵ年平均よりは少なかったと判断されます。

加入前個体の分布量 今年4月に行われた漁獲対象前のスルメイカ(外套長2~10cmの個体)の分布量調査によると、1調査点当たりの平均採集個体数は35.0個体で、昨年(54.5個体)の64%、過去5ヵ年平均(33.0個体)の106%でした(図2)。これらのうち、5~7月に漁獲対象に成長する5cm以上の個体の分布量は、昨年および過去5ヵ年平均をやや上回りました。

これらのイカは、今後、北陸以北の海域に来遊することから、北陸以北では、昨年および過去5ヵ年平均をやや上回る漁獲が期待されます。

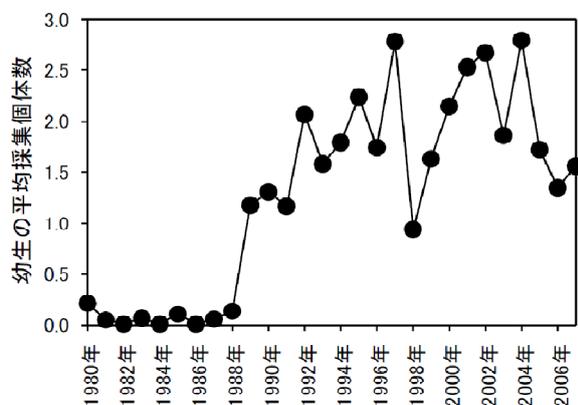


図1 幼生の平均採集個体数の年推移

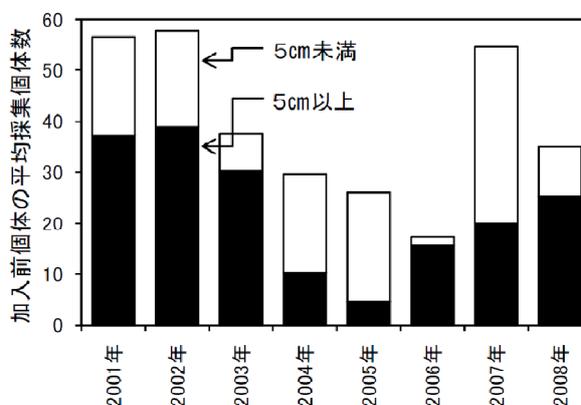


図2 加入前個体の平均採集個体数の年推移

2. 石川県の漁況の見通し

沿岸へのスルメイカの来遊は、沖合からの冷水域の張り出しに左右されます。本県の春期(5～7月)の生鮮スルメイカの漁獲量と3月の島根沖冷水、山陰若狭冷水および佐渡沖冷水の張り出しの強さとの関係を見ると(図3)、冷水域の張り出しが強いほど漁獲量は多くなる傾向があります。冷水域の張り出しが強いと、イカは沿岸寄りを北上します。加えて、沿岸水温が低めになると、イカの北上はゆっくりとなり、本県沿岸の漁場形成が長期に渡って続くためと考えられます。昨年は冷水域の張り出しが非常に弱く、本県の漁獲量は著しく少なくなりました。今年の冷水域の張り出しの強さから推定すると、過去5ヵ年並みの漁獲量が期待されます。しかし、対馬暖流域の4～6月の水温は「やや高め」と予想されており、このため魚群の北上は早く、漁期は短くなると考えられます。これらのことから、5～7月の本県の漁獲量は、昨年(1,753トン)を上回るものの、過去5ヵ年平均(3,556トン)には及ばないと予想されます。

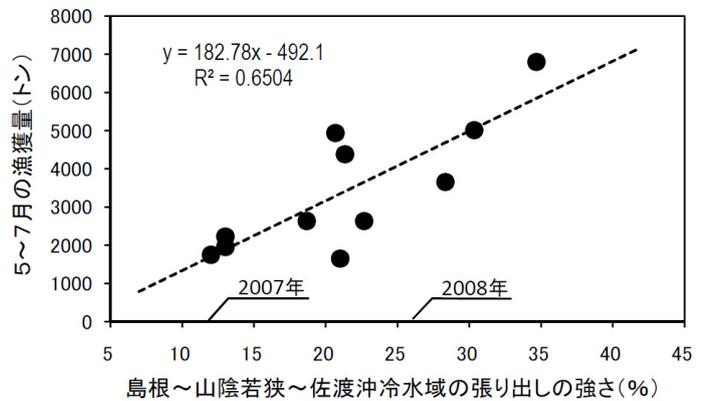


図3 本県の春期における生鮮スルメイカの漁獲量と冷水域の張り出し(3月の各冷水域の張り出し強度の平均値)の関係

3. 山陰沖の漁況の現状

境港の今年3月上旬～4月中旬の漁獲量は、昨年を大きく下回り、1998年以降では2番目に少ない水準となっています(図4)。4月に入っても昨年を下回る漁獲量であることから、山陰沖では、今後も昨年を下回る水準で経過すると予想されます。

山陰沖では、5月まで昨年の春～夏に生まれた大型のスルメイカが主な漁獲対象となり、これらの来遊は少ないものと考えられます。

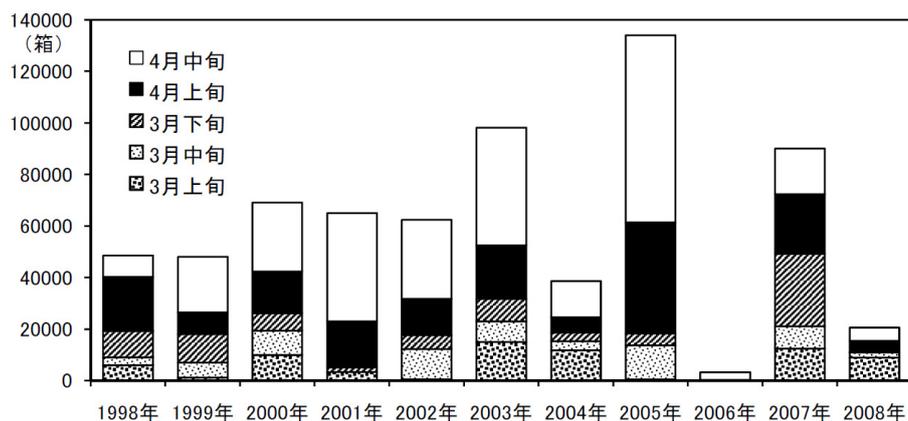


図4 境港(鳥取県)におけるスルメイカの水揚げ箱数の年推移

2008年 スルメイカ情報 第2号

石川県水産総合センター
 TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324
<http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm>

■ 調査船白山丸のいか釣り試験操業結果 ■

調査船白山丸は、5月21日から30日に、大和堆海域～日本海西部海域でいか釣り試験操業を行いました(表1・図1)。

今回の調査では、分布密度の指標であるCPUE(釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数)は3.0～14.3尾と全般的に低く、好漁場を見つけることはできませんでした。北緯37度以北・東経136度以西の沖合海域で5月に実施した過去の試験操業と比較したところ(図1)、今年の平均CPUEは8.6尾であり、過去5ヵ年平均(26.6尾)の32%と昨年に引き続き低い値となりました。この結果から、5月末の段階では、沖合海域へのスルメイカの来遊量は平年を下回っており、沖合いか釣りでは、昨年同様、漁期始めの苦戦が予想されます。試験操業の漁獲物は冷凍いか銘柄の51～60尾入りと61～70尾入りが主体で、サイズは平年並みでした。

今後、白山丸は6月下旬にスルメイカ漁場一斉調査を実施します。この調査では他県の調査船もいか釣り調査を実施し、それらの結果を総合して資源水準が評価されます。この結果については、7月上旬にお知らせします。

表1 調査船白山丸第1次いか釣り調査結果

調査日	操業位置	操業時間 釣り機台数	釣獲尾数 (ケース数)	CPUE	主な漁獲物のサイズ		水温 (°C)	
					外套長	主な銘柄	0 m	50 m
5月21日	39_07.0 N 134_54.7 E	9.0時間 14台	1,236尾 (20C/S)	9.8尾	17~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	15.1	12.01
5月22日	38_36.3 N 134_10.8 E	2.0時間 14台	63尾 (1C/S)	3.0尾	17~19 cm		15.1	12.53
5月22日	38_32.4 N 134_05.1 E	6.5時間 14台	490尾 (7C/S)	5.4尾	17~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	15.1	12.53
5月28日	38_45.3 N 133_49.6 E	9.5時間 14台	1,696尾 (24C/S)	14.3尾	18~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	16.6	13.95
5月29日	38_02.1 N 133_04.5 E	9.0時間 14台	868尾 (13C/S)	6.9尾	17~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	17.2	14.44
5月30日	37_48.5 N 135_01.2 E	8.5時間 14台	1,474尾 (23C/S)	12.4尾	18~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	16.4	12.56

白山丸のいか釣り装備：自動いか釣り機14台、メタルハライドランプ234キロワット

CPUE：自動いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(資源量の指標)

主な銘柄：ブロック凍結(8.3キログラム)当たりの尾数に基づく銘柄

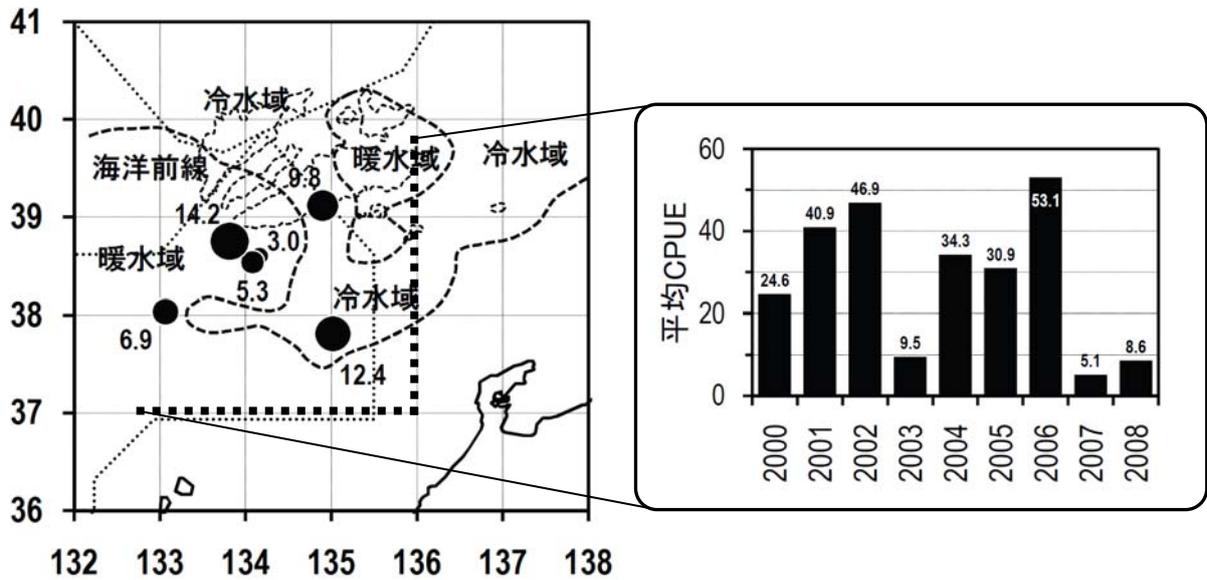


図1 白山丸第1次いか釣り調査のCPUE分布・同時期調査の平均CPUEの年推移

■ いか釣り漁場と生いかの水揚量 ■

人工衛星の夜間可視光画像から判断した6月1日現在の漁場は図2のとおりです。漁場の中心は金沢沖ですが、佐渡沖でも5月下旬から漁場形成が認められます。昨年は沿岸水温が高かったため、漁場の北上が早く経過しましたが、今年は平年並みで推移しています。

本県の5月の生いか水揚量は不漁だった昨年を下回っており、特に20尾入りと25尾入りが極端に少なく、30尾入りと40尾入りは昨年をやや上回っています(図2)。本県沿岸で5～6月に漁獲されるイカのうち、大型サイズは春・夏生まれの産卵群であり、これらの来遊量が少ないと考えられます。一方、小型サイズは秋・冬生まれの北上群であり、これらの来遊量は昨年よりもやや多いと考えられます。また、燃油高騰で出漁を控えている漁船もあることが、水揚げが伸び悩む一因になっています。

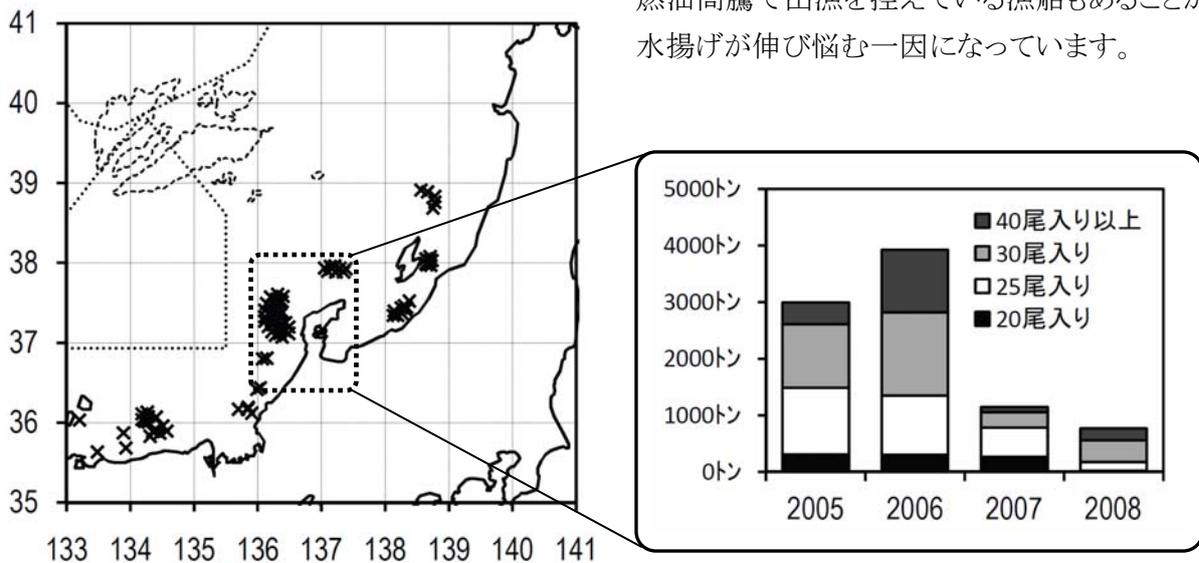


図2 夜間可視光画像から判断したいか釣り漁場・本県の5月の生いか水揚量

2008年 第2回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2008年8～12月)

2008年7月18日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2008年8～12月の見通し

- 今期のスルメイカの来遊量は、日本海全体では昨年および近年平均を上回ると予想されます。
- 海域別の来遊量は、長崎県から北海道渡島半島の沿岸、並びに沖合海域(日本海中央部)では昨年および近年平均を上回り、北海道の後志から宗谷の沿岸では昨年来を上回るものの、近年平均並みと予想されます。
- 魚体サイズは、期間前半には近年平均より小さいと予想されます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づき、石川県水産総合センターが県内版として情報提供するものです。全国向けの情報は、(独)水産総合研究センターのホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>) をご覧ください。

1. 日本海漁場一斉調査の結果

資源量 スルメイカの資源量は、毎年6月下旬から7月上旬に調査船が実施する漁場一斉調査の結果に基づいて評価されます。この調査では、漁獲尾数、釣り機台数および操業時間から、釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(以下「CPUE」という)が求められ、全調査点の平均CPUEが資源量の指標になります。

今年の平均CPUEは21.06尾であり、昨年(11.18尾)の188%、近年(2003～2007年)平均(14.43尾)の146%でした(図1)。この結果から、今期の日本海における資源量は昨年および近年平均を上回ると判断されました。

魚体の大きさ 漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套長別の資源量を調べた結果によると、今年は外套長20cm未満の資源量は昨年および近年平均の約2倍でしたが、外套長23cm以上の資源量は近年平均の約2割と少ないことが明らかになりました(図2)。小型個体が多かったことが今年の特徴となっています。

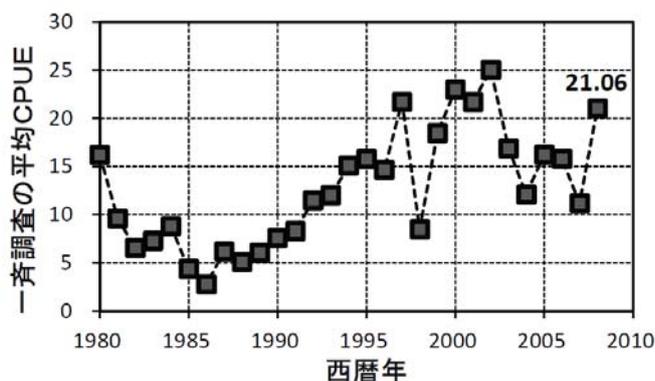


図1 一斉調査の平均CPUEの経年変化

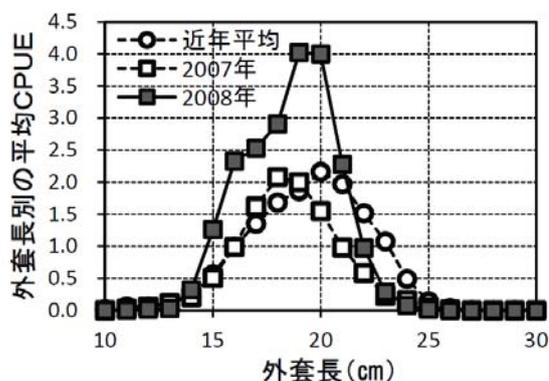


図2 外套長階級別の平均CPUEの比較

分布状況 漁場一斉調査時におけるスルメイカの分布状況は図3のとおりでした。青森県以北の沿岸では、CPUEが20尾以上の分布密度の高い調査点が多かったものの、外套長17cm未満の小型個体が多数を占めました。一方、島根県から秋田県の沿岸では、CPUEが20尾以下の調査点が多くみられました。

沖合海域では、日本海中央部の大和堆付近でCPUEが50尾以上の分布密度の高い調査点が複数みられました。外套長20cm前後の個体が多く、沿岸に比べて魚体サイズは大きめでした。

2. 今年6月までの漁模様

今年は、昨年に比べて沿岸水温の上昇が緩やかで、魚体サイズも小さかったことから、漁期開始が遅くなりました。このため、石川県から秋田県では、5月の水揚量は昨年および近年平均の半分以下となりました。しかし、6月以降、水揚量は増加し、4～6月の水揚量は昨年並みに近づいています(図4)。石川県では、例年7月になると漁獲量は減少しますが、今年は7月上旬に入っても活発な水揚げが続いています。

なお、今年は魚体サイズが小さかったことに加えて、燃油高騰で操業をひかえた漁船もあったため、資源量の割に水揚量は少なくなっていると考えられます。

3. 太平洋側のスルメイカ漁況予報

太平洋側を北上する冬季発生系群のスルメイカの一部は、秋以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊します。平成20年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報によると(図5)、太平洋側の資源量は昨年を下回ると予想されています。日本海では、11月頃まで秋季発生系群が主に漁獲されますが、冬季発生系群が漁獲の主体となる12月以降、沖合海域および沿岸とも漁獲量は減少すると予想されます。

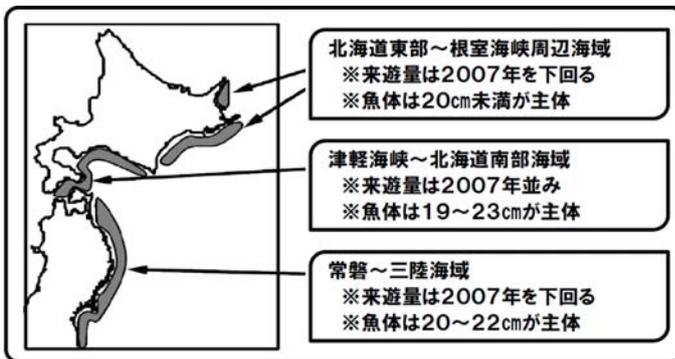


図5 太平洋側の7～9月のスルメイカ漁況予報

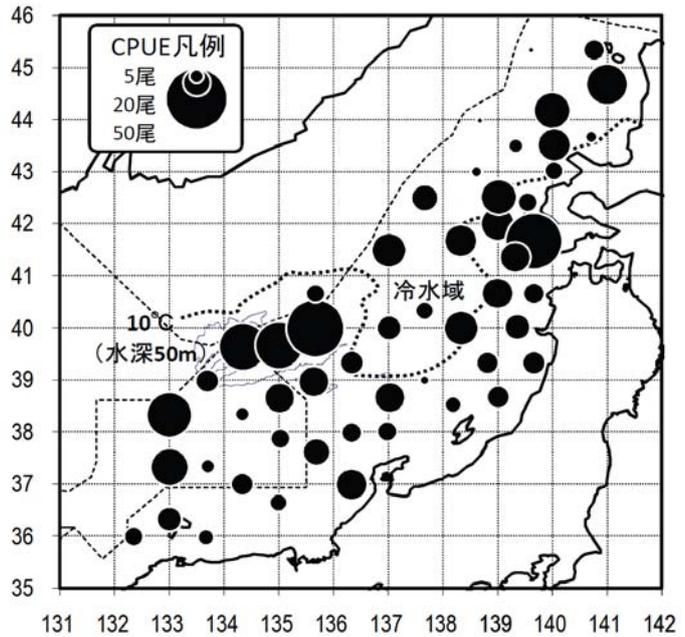


図3 漁場一斉調査時のスルメイカの分布

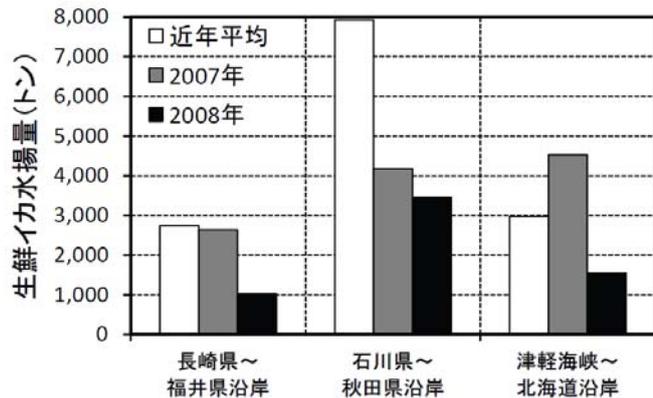


図4 4～6月の生鮮スルメイカの水揚量の比較

2009年 第1回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2009年5~7月)

2009年4月28日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2009年5~7月の見通し

- 今期のスルメイカの来遊量は、日本海全体では過去5ヵ年平均並みと予想されます。しかし、石川県周辺海域の漁獲量は、昨年並みで、過去5ヵ年平均を下回ると予想されます。
- 日本海対馬暖流域の水温はやや高めで推移すると予想されており、魚群の北上は昨年並みであるものの、石川県沿岸では昨年よりも早く、漁期は昨年よりも短くなると考えられます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づいて、石川県水産総合センターが県内に情報提供するものです。全国向けの情報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/index.html>)をご覧ください。

1. 資源の状況

幼生の分布量 日本海では、昨年の秋に生まれたスルメイカが今年の春以降に漁獲されます。昨年10~11月に行われた幼生の分布量調査の結果では、1調査点当たりの平均採集個体数は1.01個体であり、2007年(1.56個体)の65%、過去5ヵ年平均(1.86個体)の54%でした(図1)。

従って、昨年秋に発生した幼生の分布量は、1990年代以降の高水準を維持しているものの、昨年および過去5ヵ年平均より少なかったと判断されます。

加入前個体の分布量 今年4月に行われた漁獲対象前のスルメイカ(主に外套長2~10cmの個体)の分布量調査によると、1調査点当たりの平均採集個体数は81.3個体で、昨年および過去5ヵ年平均を大きく上回りました(図2)。しかし、このうち、5~7月に漁獲対象となる5cm以上の個体の分布量は17.7個体で、過去5ヵ年平均(15.3個体)並みでした。

この5cm以上のイカは、今後、成長して北陸以北の海域に来遊することから、北陸以北では、過去5ヵ年平均並みの漁獲量が期待されます。

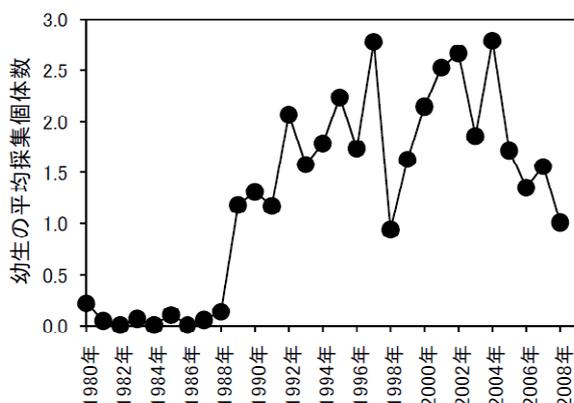


図1 幼生の平均採集個体数の年推移

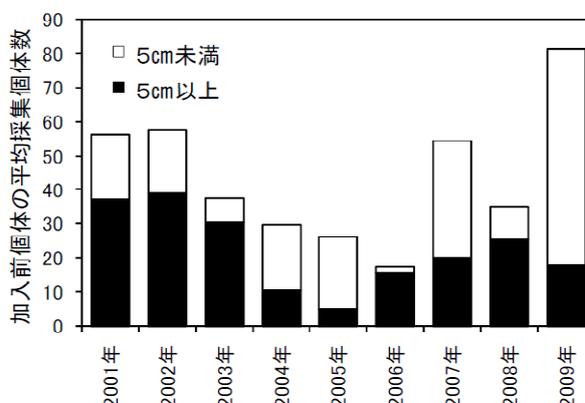


図2 加入前個体の平均採集個体数の年推移

2. 石川県沿岸の漁況の見通し

沿岸へのスルメイカの来遊は、沖合からの冷水域の張り出しに左右されます。本県の春期(5~7月)の生鮮スルメイカの漁獲量と3月の島根沖冷水、山陰若狭冷水および佐渡沖冷水の張り出しの強さとの関係を見ると(図3)、冷水域の張り出しが強いほど漁獲量が多い傾向にあります。冷水域の張り出しが強いと、イカは沿岸寄りを北上します。加えて、沿岸水温が低めになると、イカの北上はゆっくりとなり、本県沿岸の漁場形成が長期に渡って続くためと考えられます。

今年の冷水域の張り出しの強さから推定すると、本県の今期の漁獲量は、昨年並み(2,900トン前後)で、過去5ヵ年平均(3,594トン)を下回ると予想されます。また、5~6月の日本海対馬暖流域の水温はやや高めで推移すると予想されており、石川県沿岸では、魚群の北上が昨年よりも早く、漁期は昨年(5~7月)よりも短くなると考えられます。

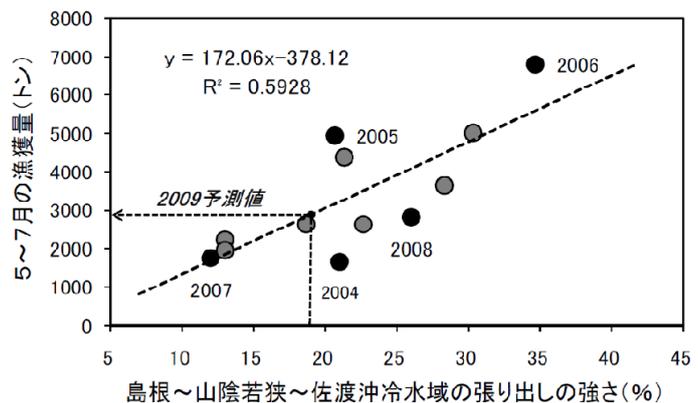


図3 本県の春期における生鮮スルメイカの漁獲量と冷水域の張り出し(3月の各冷水域の張り出し強度の平均値)の関係

3. 山陰沖の漁況の現状

山陰沖では、3~5月には、前年の春・夏に生まれたスルメイカが漁獲対象になりますが、境港の今年3月上旬~4月中旬の漁獲量は、漁獲量が少なかった昨年をさらに下回る水準で推移しています(図4)。鳥取県のいか釣り漁船および調査船による操業試験でも、全般的に漁獲成績は低調であり(鳥取県水産試験場「魚取新報 94号」より)、春・夏生まれのスルメイカの来遊量は少ないと考えられます。

石川県沿岸でも、春期には、春・夏生まれのスルメイカが漁獲され、それらは20尾入や25尾入の比較的魚体の大きい銘柄として水揚げされます。山陰沖と同様、本県沿岸への春・夏生まれのスルメイカの来遊量がこのまま少なく推移する場合には、まだ魚体の小さい秋生まれのイカが漁獲の主体になると考えられます。

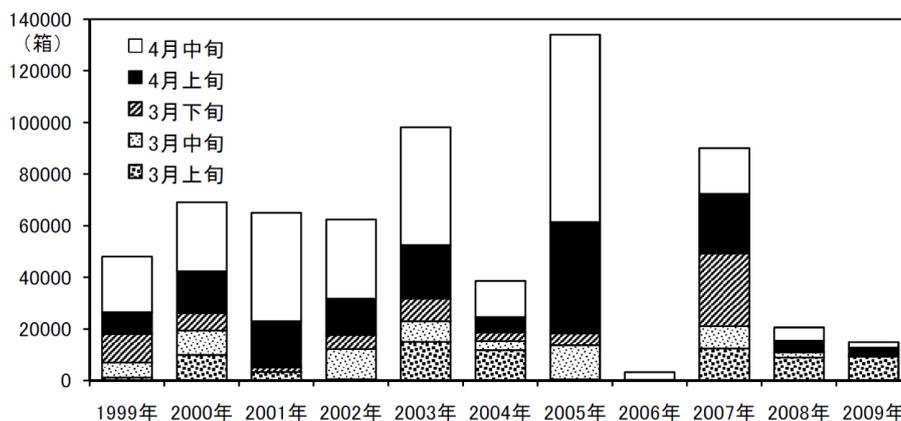


図4 境港(鳥取県)におけるスルメイカの水揚げ箱数の年推移

2009年 スルメイカ情報 第1号

石川県水産総合センター

TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324

<http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/signbu.htm>

■ 調査船「白山丸」によるいか釣り試験操業結果 ■

調査船「白山丸」は、5月19日から26日に、能登沖～大和堆海域～日本海西部海域でいか釣り試験操業を行いました(表1・図1)。

本調査の結果、分布密度の指標であるCPUE(釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数)は16.8～43.8尾でした。北緯37度以北・東経136度以西の沖合海域で5月に実施した過去の操業結果と比較したところ(図1)、今年の平均CPUEは30.7尾であり、不漁であった昨年および一昨年を上回り、過去5年平均(26.4尾)の116%となりました。これらの結果から、5月末現在、沖合海域へのスルメイカの来遊量は平年をやや上回っていたと判断されます。但し、魚体サイズ(外套長)は、昨年および過去5年平均に比べて明らかに小型でした。特に、東寄りほど魚体が小さい傾向にあり、101尾入り(冷凍いか銘柄)が多数を占める操業点もありました。このため、来遊量は多いものの、初漁期の漁獲箱数は伸び悩むと考えられます。

今後、白山丸は6月下旬にスルメイカ漁場一斉調査を実施します。この調査では、他県の調査船も加わり、それらの結果を総合して資源量水準が評価されます。この結果については、7月上旬にお知らせします。

表1 調査船「白山丸」による第1次いか釣り調査結果

調査日	操業位置	操業時間 釣り機台数	釣獲尾数 (ケース数)	CPUE	主な漁獲物のサイズ		水温(°C)	
					外套長	主な銘柄	0 m	50 m
5月19日	38_03.1 N 137_18.6 E	9.0時間 14台	2,111尾 (20C/S)	16.8尾	15~17 cm	101~ 尾入	14.8	12.17
5月20日	39_04.7 N 135_53.6 E	9.0時間 14台	5,515尾 (60C/S)	43.8尾	14~15 cm	101~ 尾入	15.1	9.56
5月21日	38_59.0 N 134_34.6 E	9.0時間 14台	3,636尾 (38C/S)	28.9尾	14~16 cm	101~ 尾入 51~60尾入	13.3	8.53
5月22日	39_00.0 N 134_02.6 E	9.0時間 14台	3,185尾 (51C/S)	25.3尾	18~20 cm	51~60尾入 101~ 尾入	12.7	9.70
5月23日	38_30.6 N 133_20.0 E	9.0時間 14台	3,997尾 (72C/S)	31.7尾	17~18 cm	51~60尾入 61~70尾入	15.4	12.11
5月24日	37_48.5 N 132_38.2 E	9.0時間 14台	3,629尾 (45C/S)	28.8尾	16~17 cm	51~60尾入 61~70尾入	16.1	11.86
5月25日	38_04.7 N 134_08.4 E	9.0時間 14台	3,284尾 (50C/S)	26.1尾	18~19 cm	51~60尾入 61~70尾入	16.4	12.50

白山丸のいか釣り装備: 自動いか釣り機14台、メタルハライドランプ234キロワット

CPUE: 自動いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(資源量の指標)

主な銘柄: ブロック凍結(8.3キログラム)当たりの尾数に基づく銘柄

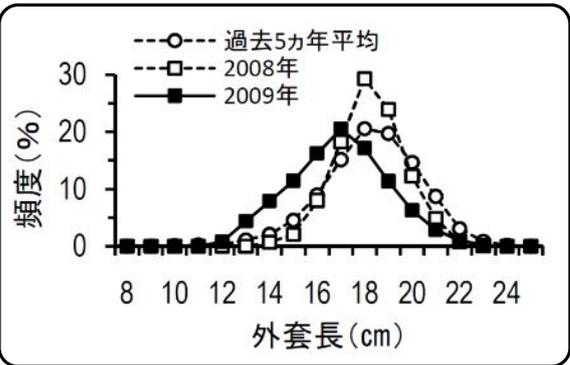
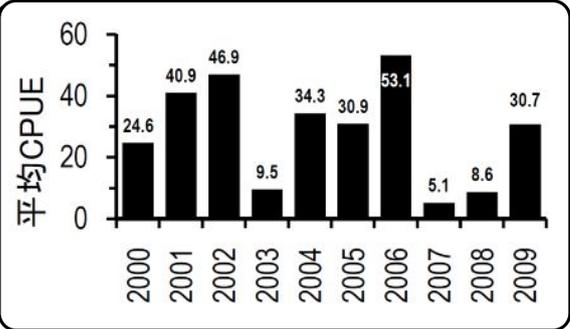
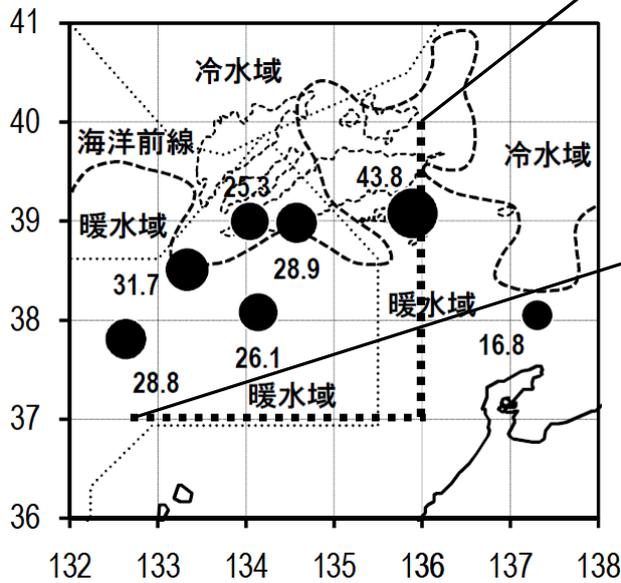


図1 調査船「白山丸」による第1次いか釣り調査のCPUE分布・同時期調査の平均CPUEの年推移

■ いか釣り漁場と生いかの水揚量 ■

人工衛星の夜間可視光画像から、5月20日時点の漁場は、能登半島西部、禄剛崎沖、佐渡沖の他、能登内浦海域沿岸に形成されていました(図2)。県内では、5月下旬以降、金沢方面の水揚量が減少し、輪島～珠洲方面の水揚量が増加する傾向にあります。6月に入ってから、山形県や青森県でも水揚げが始まっています。

本県の5月の生いか水揚量は、不漁であった昨年をやや上回るものの、過去4か年平均の42%と伸び悩んでいます(図2)。昨年に引き続き、20尾入りと25尾入りが少ないことが特徴で、大型サイズの春・夏生まれ群の来遊量が少ない状況です。小型サイズの秋・冬生まれ群の来遊量も少なく、これらは沖合を北上しているものと考えられます。

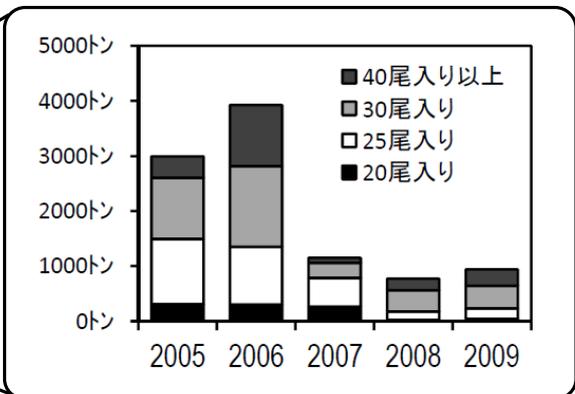
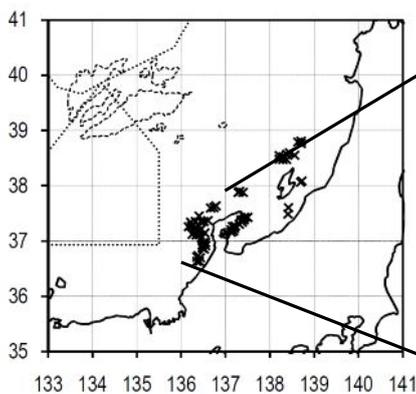


図2 夜間可視光画像から判断したいか釣り漁場・本県の5月の生いか水揚量

2009年 第2回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2009年8~12月)

2009年7月23日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2009年8~12月の見通し

- 来遊量(資源量)は、日本海全体では、昨年および近年平均並みと考えられます。
- 海域別の来遊量については、長崎県~北海道渡島半島の沿岸では、近年平均を下回り、昨年並みと予想されます。北海道の後志~宗谷の沿岸、並びに沖合では、昨年および近年平均並みと予想されます。
- 北陸沿岸では、活発な漁場形成はありませんが、沖合では、イカの南下が始まる9月以降、好漁場が形成されると予想されます。
- 魚体サイズは、期間前半には、近年平均より小さいと予想されます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づき、石川県水産総合センターが県内版として情報提供するものです。全国向けの情報は、(独)水産総合研究センターのホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>) をご覧ください。

1. 日本海漁場一斉調査の結果

資源量 日本海のスルメイカの資源量は、毎年6月下旬から7月上旬に調査船が実施する漁場一斉調査の結果に基づいて評価されます。この調査では、漁獲尾数、釣り機台数および作業時間から、釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数(以下「CPUE」という)を求め、全調査点のCPUEの平均値を資源量の指標とします。今年(2009年)の平均CPUEは18.24尾であり、昨年(2008年)の87%、近年(2004~2008年)平均(15.27尾)の119%でした(図1)。この結果から、今年(2009年)の日本海における資源量は昨年および近年平均並みと判断されました。

魚体の大きさ 漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套長別の資源量を調べた結果によると、今年(2009年)の外套長18cm未満の資源量は、昨年並みで、近年平均を上回りました。しかし、外套長21cm以上の資源量は、昨年および近年平均を下回りました(図2)。漁場一斉調査の時点では、魚体が全般的に小型でした。

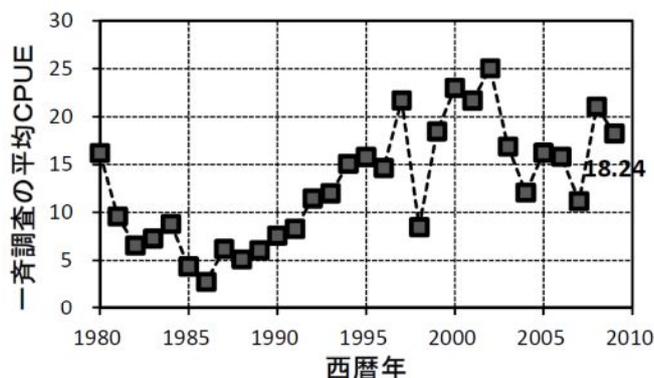


図1 一斉調査の平均CPUEの経年変化

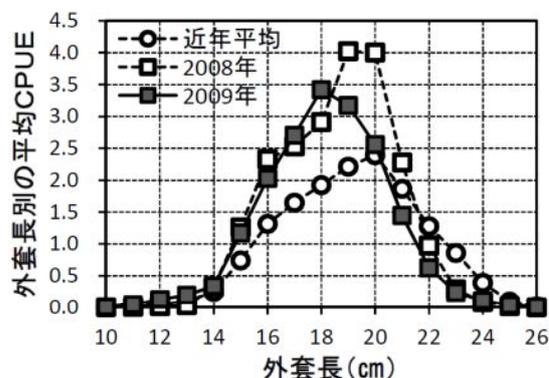


図2 外套長階級別の平均CPUEの比較

分布状況 漁場一斉調査時のスルメイカの分布状況は図3のとおりでした。沿岸では、能登半島～佐渡周辺、北海道の後志～宗谷で、CPUEが20尾以上の分布密度の高い調査点が多く、北海道西沖の武蔵堆では、CPUEが180尾の調査点もみられました。津軽海峡～北海道南部の分布密度は低い傾向にありました。これらの沿岸では、外套長17～18cmの小型個体が多数を占めました。

沖合では、日本海中央部の大和堆を中心にCPUEが30尾前後の分布密度の高い調査点が多くみられました。沿岸に比べて外套長21cm以上の比率は高かったものの、外套長23cm以上の個体は近年平均よりも少なく、沿岸と同様に魚体は小型の傾向にありました。

2. 今年6月までの漁模様

昨年は燃油高騰などの影響で春期の水揚量は低調でした。今年4～6月の生鮮スルメイカの水揚量は、石川県～秋田県沿岸では、昨年を上回ったものの、近年平均を下回りました(図4)。津軽海峡～北海道沿岸では、昨年並みで近年平均を下回りました。これらの状況から、今年は沿岸では北上が遅れているものと考えられます。

3. 太平洋側のスルメイカ漁況予報

太平洋側を北上する冬季発生系群のスルメイカの一部は、秋以降、宗谷海峡および津軽海峡を経て日本海に來遊します。平成21年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、道東太平洋海域、常磐～三陸海域の來遊量は前年を上回ると予想されています(図5)。今年5月に常磐～三陸沖合で実施された幼イカ調査の分布量は前年を大きく上回っており、今後の漁獲加入が期待されます。

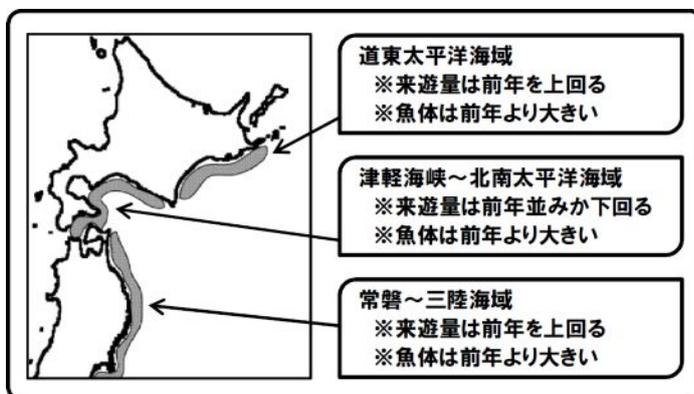


図5 太平洋側の7～9月のスルメイカ漁況予報

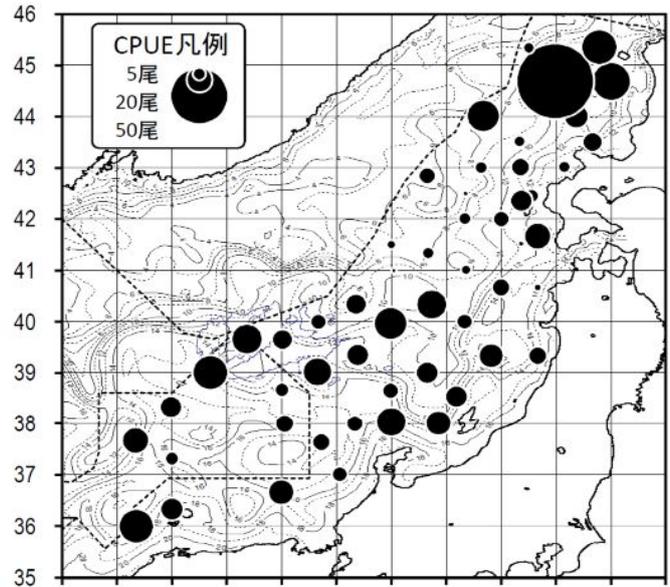


図3 漁場一斉調査時のスルメイカの分布と50m 深水温

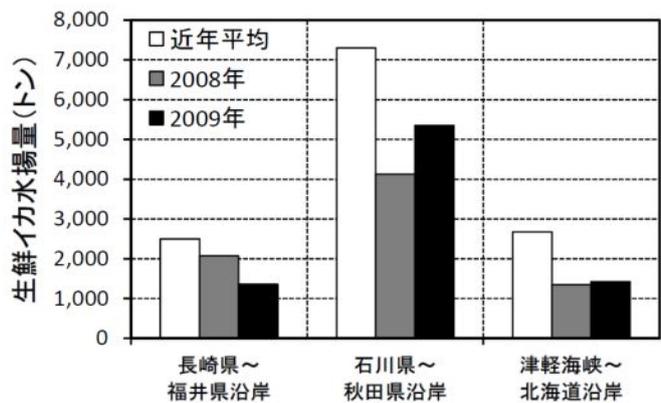


図4 4～6月の生鮮スルメイカの水揚量の比較

今年5月に常磐～三陸沖合で実施された幼イカ調査の分布量は前年を大きく上回っており、今後の漁獲加入が期待されます。

※ 漁場一斉調査時に北海道西沖に分布したスルメイカは、9月以降、沖合を南下し、加えて太平洋側のスルメイカも日本海に來遊・南下します。このため、秋以降日本海沖合では好漁場が形成されると予想されます。

2010年 スルメイカ情報 第1号

石川県水産総合センター
 TEL 0768-62-1324 FAX 0768-62-4324
<http://www.pref.ishikawa.jp/suisan/center/sigenbu.htm>

■ 石川県沿岸の漁況(5~7月)の見通し ■

石川県沿岸の漁況は、スルメイカの分布域の広がりに影響されると考えられます。(独)水産総合研究センターが運用する海洋シミュレーションシステム(JADE)では、数値計算により2003年以降の日本海の表中層の日々の水温が再現されており、2カ月先までの予測も可能になっています。このシステムの計算値から、スルメイカの分布域の広がりを推定し、5~7月の漁況を下記の方法で予測しました。

沿岸では、50m深水温が12℃程度に上昇するとイカ釣り漁が始まります。沖合では、6月には50m深水温が10~14℃の海域で操業が行われます。そこで、50m深水温が10~14℃の海域をスルメイカの分布域とし、2003年以降の5月中旬の分布域を調べました(図1)。水揚量が少なかった2007・2008・2009年には分布域が能登以北の沿岸に広く形成されたり、朝鮮半島から大和堆に至る沖合域に広がったりしていました。これに対して、好漁であった2005・2006年には、分布域が沿岸寄りにありました。つまり、分布域が広い範囲に広がらず、能登~山陰の沿岸寄りに形成されている年に好漁になると考えられます。

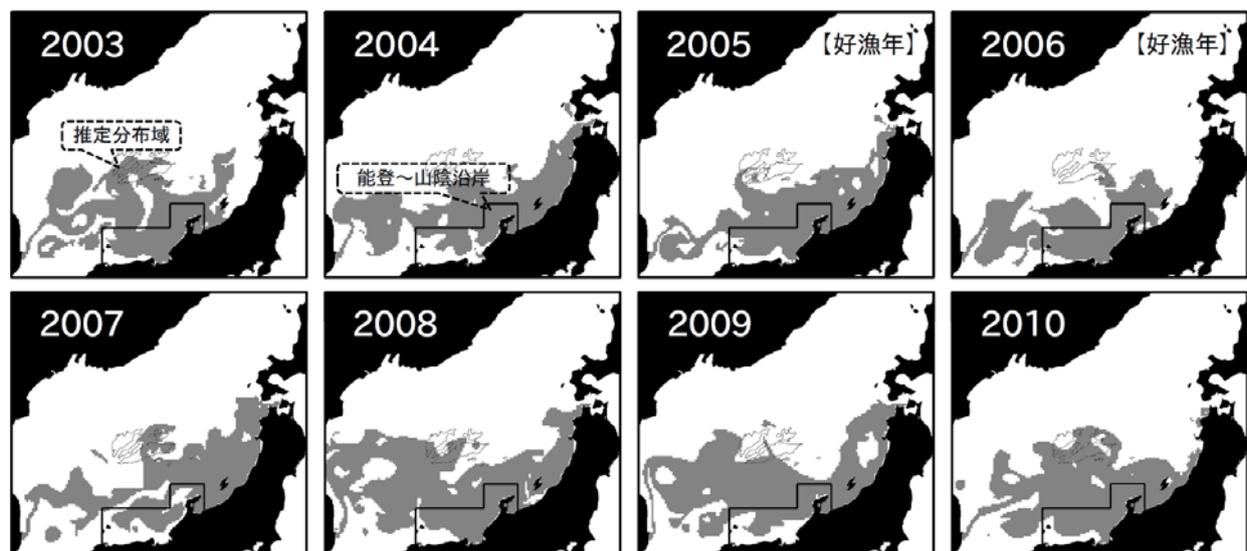


図 1. 5月中旬のスルメイカの推定分布域(枠で囲んだ部分を能登~山陰沿岸域とする)

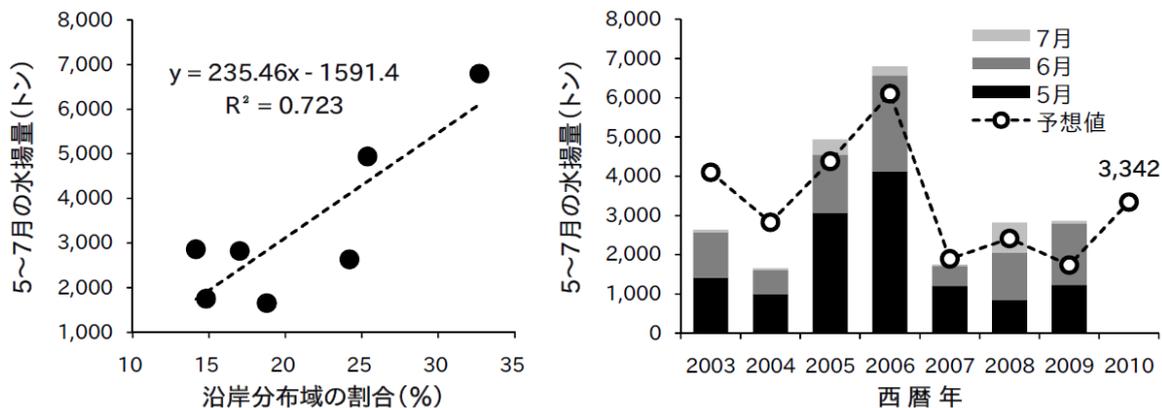


図 2. スルメイカの分布域全体に占める能登～山陰沿岸の分布域の割合と 5～7 月の生鮮スルメイカ水揚量の関係(左),並びに 2010 年 5～7 月の水揚量の予測(右)

そこで,分布域全体に占める能登～山陰沿岸の分布域(図1:太枠の範囲)の割合を求め,本県の 5～7月の生鮮スルメイカの水揚量との関係を調べたところ(図2),両者の間には高い正の相関関係が認められました。この相関関係に基づいて予測した本県の今年5～7月の水揚量は3,342トンとなり,昨年(2,862トン)を上回り,過去5カ年平均(3,835トン)をやや下回ると予想されます。

■ スルメイカ幼生の分布量 ■

日本海では,昨年の秋に生まれたスルメイカが今年の春以降に漁獲されます。昨年10～11月に山陰沖から九州五島列島沖で行われたスルメイカ幼生の分布量調査では(図3),1調査点当たりの平均採集個体数は1.24個体であり,過去10年間のうちでは昨年に次ぐ低い値でした。

幼生の分布海域は広範囲にわたっており,資源悪化の兆候となる分布域の縮小は認められていないことから,今年直ちに大幅な資源減少に至ることはないと考えられます。しかしながら,幼生の分布密度は2004年以降減少傾向にあることから,今後,資源動向を注視していく必要があります。

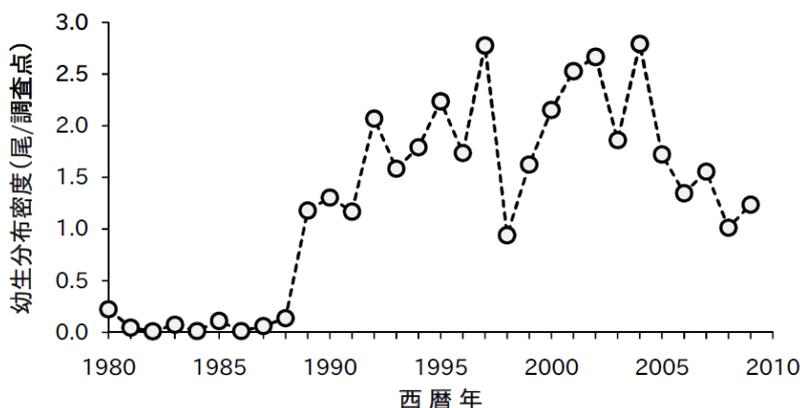


図 3. スルメイカ幼生の調査点当たり平均採集個体数(ネット曳調査結果)

2010年 第1回 日本海スルメイカ漁況予報

(予報対象期間 2010年5~7月)

2010年4月30日 発行

石川県水産総合センター TEL 0768-62-1324

2010年5~7月の見通し

- スルメイカの来遊量は、日本海全体では昨年および過去5ヵ年平均を下回ると予想されます。
- 石川県沿岸の漁獲量は、昨年を上回り、過去5ヵ年平均を下回ると予想されます。
- 魚群の北上は、昨年および近年平均よりも遅いと考えられます。
- 魚体の大きさは、昨年および近年平均よりも小さいと考えられます。

この予報は、関係道府県研究機関、(独)水産総合研究センター、(社)漁業情報サービスセンター等が検討した結果に基づいて、石川県水産総合センターが県内向けに情報提供するものです。全国向けの情報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>)をご覧ください。

1. 日本海の資源状況

幼生の分布量 日本海では、昨年の秋に生まれたスルメイカが今年の春以降に漁獲されます。昨年10~11月に行われた幼生の分布量調査の結果では、1調査点当たりの平均採集個体数は1.24個体であり、2008年(1.01個体)の123%、過去5ヵ年平均(1.69個体)の73%でした(図1)。

幼生の分布域は広範囲にわたっており、資源悪化の兆候となる分布域の縮小は認められていません。しかしながら、分布量は2004年以降減少傾向にあることから、今後、資源動向を注視していく必要があります。

加入前個体の分布量 今年4月に行われた漁獲対象前のスルメイカ(主に外套長2~10cmの個体)の分布量調査によると、1調査点当たりの平均採集個体数は18.6個体で、昨年(81.3個体)および過去5ヵ年平均(42.9個体)を下回りました(図2)。

このうち、5~7月に漁獲対象となる5cm以上の個体の分布量は2.0個体で、昨年(17.7個体)および過去5ヵ年平均(16.7個体)を大きく下回りました。

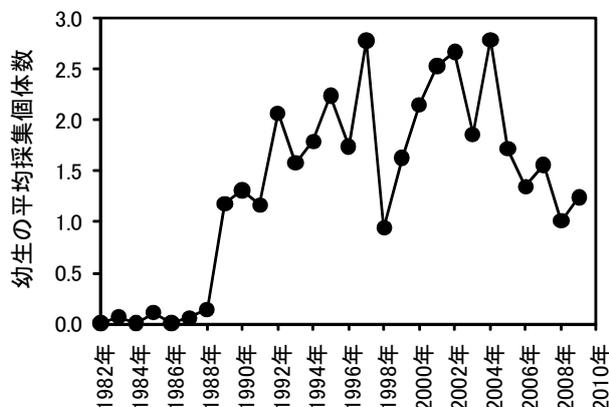


図1 幼生の平均採集個体数の年推移

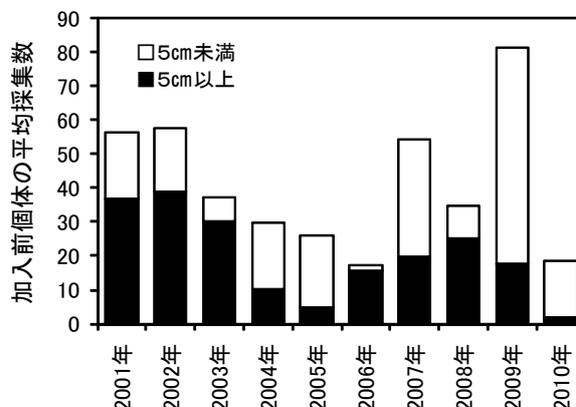


図2 加入前個体の平均採集個体数の年推移

2. 石川県沿岸の漁況の見通し

石川県沿岸の漁況はスルメイカの分布域に影響されると考えられます。そこで、深度50mの水温が10～14℃の海域を分布域とし、2003年以降の5月中旬の分布域を調べました。その結果、水揚量が少なかった2007・2008・2009年には分布域が能登以北の沿岸に広く形成されたり、朝鮮半島から大和堆に至る沖合域に広がったりしていました。一方、好漁であった2005・2006年には分布域が能登～山陰の沿岸寄りにありました。つまり、分布域が広い範囲に広がらず、能登～山陰の沿岸寄りにある年に石川県沿岸で好漁になると考えられます。

そこで、分布域全体に占める能登～山陰沿岸の分布域の割合を求め、石川県の5～7月の生鮮スルメイカの水揚量との関係を調べたところ(図3)、両者の間には高い正の相関関係が認められました。この相関関係から予測した本県の今年5～7月の水揚量は3,342トンとなり、昨年(2,862トン)を上回り、過去5カ年平均(3,835トン)をやや下回ると予想されます。

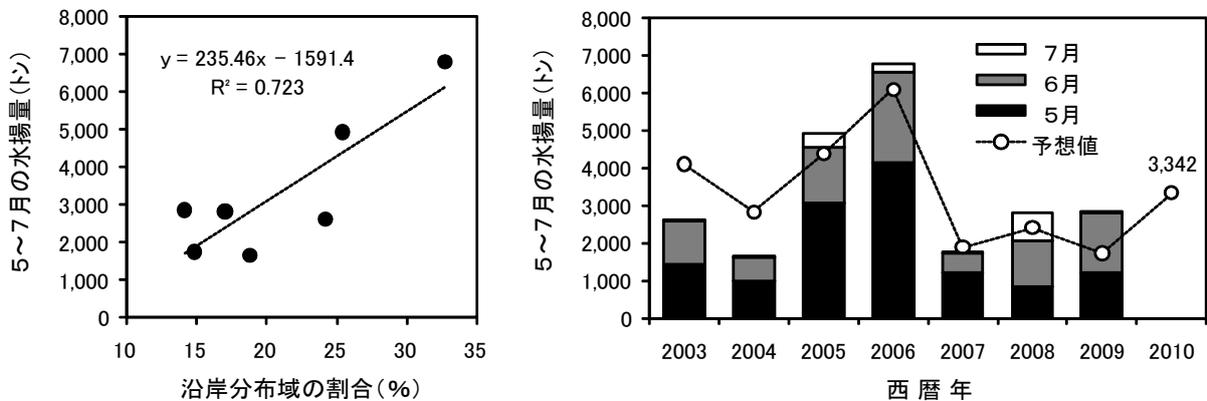


図3 スルメイカの分布域全体に占める能登～山陰沿岸の分布域の割合と5～7月の生鮮スルメイカ水揚量の関係(左)、並びに2010年5～7月の水揚量の予測(右)

3. 山陰沖の漁況の現状

山陰沖では、3～5月には、前年の春・夏に生まれたスルメイカが漁獲対象になりますが、境港の今年3月上旬～4月中旬の漁獲量は、漁獲量が少なかった昨年を下回る水準で推移しています(図4)。本年4月5～21日に行われた鳥取県のいか釣り漁船および調査船による漁場調査でも、全般的に漁獲成績は低調でした(鳥取県水産試験場「魚取新報106号」より)。

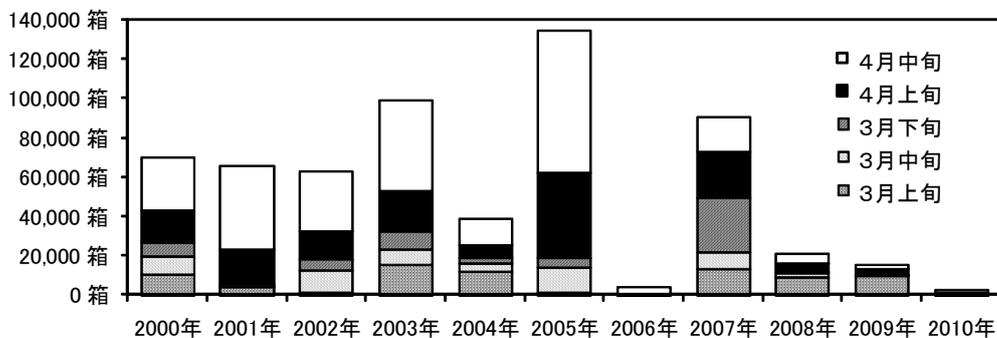


図4 鳥取県境港における3月上旬～4月中旬のスルメイカの水揚げ箱数の年推移